

自立した読書人育成のための看図アプローチの構築に向けて I  
 - 看図作文指導からの考察 -

工藤真由美\*

Study to look, and to establish a figure approach method to educate the person  
 who can make reading that became independent into it  
 -through examination of the figure composition instruction-

Mayumi Kudo

「学習指導要領」によると、国語は生涯にわたる自己形成、社会生活の向上、文化の創造と継承に欠かせないものであるものの、高校生の読書活動については低調であり、高校生がそれぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実、読書活動の展開の必要性を求めている。そこで大学生に対して、小学校から高等学校までになされなかった読書習慣の補完をし、彼らが生涯学習者として読書を通して自らの人格と人生を豊かにし、自立した読書人となるよう働きかける手法として、看図によるアプローチ法を検討することにし、はじめに看図作文の授業を実践してみた。70名の学生は積極的に看図作文の協同学習と作文に取り組み、自己の現実と向き合うような作文を作成した。授業アンケートでも85・7%の学生がとても良かった、良かったと評価した。このことから大学生は看図作文の手法を好意的に受け入れたことがわかり、今後看図を応用したアプローチ法を構築することで、読書習慣の形成に向けて有効にはたらきかけることの可能性が高まった。

**Key words:** 看図作文 絵図 協同学習 読書習慣形成

はじめに

本稿の目的は、大学生の読書に関して、有効な読書習慣の形成の方法を検討するにあたり、看図アプローチの技法を用いることの適否について検討することを目的とする。そのためにまず、看図アプローチが絵図を見て作文するという看図作文から派生していることを踏まえ、大学生に看図作文授業を試み、学習の取り組みの様子や授業後のアンケートなどの分析により、大学生に看図アプローチという技法が適用可能であるかどうかを検証することにする。

第1章 国語教育における読書習慣の現状と課題

- (1) 学習指導要領高等学校国語科が求めるもの  
 文学は人間にとっていかなる存在であるのか。

このことは古来多くの哲学者、文学者、教育学者などにより問われてきた根源的な問いである。教育の場面でこの問いを投げかける時、国語科教育において文学を読むことで、登場人物の行いや思いを想像し、そのことを通して感性・情緒を育成し、深く共感したり豊かに想像したりする力を育成することができる存在であるとされる。国語科教育に関しての日本の教育の現状は以下のようである。

平成30年告示「学習指導要領高等学校国語」(1)においては、国語の資質・能力の基礎を確実に育成することを重視しており、生活全体の中で国語に対する関心や理解を深め、国語に関する資質・能力の育成を図るうえで必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実するよう努めることが大切であるとし、他者や社会とかがわっていく生涯にわたる社会生活に必要な国語の特質について理解

\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

し、それを適切に使うことができる力の育成を求めている。それは国語が、生涯にわたる一人一人の自己形成、社会生活の向上、文化の創造と継承に欠かせないものだからである。一方、高校生の読書活動については低調であることから各教科において、高校生がそれぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実、読書活動の展開の必要性を求めている。

しかし、このような目標や従来の国語教育の取り組みにもかかわらず、現在、高等学校を卒業してすぐの大学1年生に焦点づけた場合、文学に触れる機会、読書に関しては全くと言っていいほど不調である。このような状況に対して、大学生の一般教養（専門課程でない）としての文学や読書に関する研究としては、大西直樹の研究<sup>(2)</sup>に詳しい。しかし、読書の習慣を形成できるような働きかけの決め手となる効果的な大学教養教育の手法についての研究、実践は十分ではない。そこで小学校から高等学校までになされなかった読書習慣の補完及び、生涯学習者として読書を通して自らの人格と人生を豊かにする人、すなわち自立した読書人を形成する手法を検討していく。

## (2) 過去の研究成果との関連

前項で見たように、小学校から高校までの国語科教育の過程で本来形成されているはずの、自立した読書人としての読書の楽しみや味わう力を大学生（文学を専攻しない）の教養課程において形成するには、時間的にも内容的にも集中特化して形成しなければならない。しかし、12年間の国語科教育の積み重ねの成果が十分でない学生に対して、半年または1年の講義において学修成果を出し、自立した読書人として生涯学習者として社会に巣立つことに貢献するような、適切な教育方法はあるのだろうか。

筆者は、これまで大学の教養教育において学生が文学を通して、作品をよく読み味わうことに主眼を置いて指導を行ってきた。しかし、学生の文学読解の浅さを痛感し表層的な理解に問題を感じていた。（工藤2019<sup>(3)</sup>、2020<sup>(4)</sup>）その多くは彼らの読書習慣の低調さに起因する。そのため大学教養課程において読書により自らの人格と人生を豊かにし、深い洞察力をもって自己の人生を考察する力の形成、すなわち自立した読書人の育成が喫緊の課題である。これについては、間瀬らの研究<sup>(5)</sup>があるが、残念ながら大学生は対象としてい

ない。また人が一人前の読書人となるためのプロセスについて、菅井<sup>(6)</sup> 垣花<sup>(7)</sup> 高橋<sup>(8)</sup>らの研究があり、さらに深谷<sup>(9)</sup>によると現状、小学生の読書量は1か月に10冊以上で推移しているが、小学生をピークに中学、高校と進むにつれて減少していくと指摘されているが、それを止める有効な方法は提案されていない。また、秋田喜代美<sup>(10)</sup>は、成人の読書量は高校時代の読書量と相関があるが、読書量だけでなく、読書の質としての忘れられない本との出会いという経験を積みあげ、読書の意義を生徒が認識するプロセスを形成していくべきと指摘している。これらから考えられることは、大学生の指導において課題となるのは①読書への意欲の喚起と、②忘れられない本との出会いの場の形成という2点であることがわかる。では、その2点を克服する有効な手法として何があるのだろうか。

鹿内信善<sup>(11)</sup>は、国語が物事を認識する力を育てる教科の一つとするならば、「みる」ことの指導を取り入れていくべきであると指摘している。また、奥泉<sup>(12)</sup>は、国語科教育には絵や写真、図といった図像テキスト、それらと文章テキストとの組み合わせから意味を構築する方法を提示している。

そもそも文字を読むことへの苦手意識を持つ学生にはビジュアルに訴える学習方法が適していると考えられる。また忘れられない本との出会いは、そこに深い感動が存在する。深い感動に至るには内容に対しての深い読解力や洞察力が求められる。そのことにより課題としての①と②両方を補うには、看図によるアプローチが適していると考えられる。以下に看図を取り入れた看図アプローチを検討し、さらに授業方法の検討をおこなうことにする。

## 第2章 看図アプローチの諸相

### (1) 看図とは何か

看図とは、手をかざしてじっとよく「見る」という意味であり、中国の作文教育で用いられる歴史のある指導法であり、使用する絵図は教師によって意図的な工夫が求められるものである。

日本では、鹿内信善らの看図作文の研究および教育実践が代表的であり、長年にわたり研究および教育実践が重ねられてきた。さらに看図作文に活用できる多くの絵図も開発してきた。その結果、2つの発見がなされた。一つは、「絵図を読み解くプロセス・文章を産出するプロセスにおいて

活発な共同学習が生まれる」<sup>(13)</sup> ということ、もう一つは「看图作文づくりのノウハウが作文以外の教科や教育領域に適用できる」<sup>(14)</sup> ということである。そのため、鹿内は「看图作文授業づくりの研究から得られたノウハウをさまざまな教科や領域の授業づくりに適用していくことを看图アプローチ」<sup>(15)</sup> とよんでいる。近年法学、心理学、看護学など様々な分野に応用した看图アプローチの研究および実践が報告されている。

ではなぜ「看图」が求められるのであろうか。看ることから生まれる効果は、じっくりと絵画を看ることで発見があり、そこから絵に描かれているもの同士の関係や、描かれていないもの（目に見えないもの）への推測が生まれる。細かな部分を見つけた後の喜び、達成感が生まれる。このような洞察力、見えないものへの推測、発見の喜び、達成感は、学習者へ次の学習への意欲をさらに喚起していく。また他者と発見を共有し補い合う中で協同学習としての学習者同士の活性化が見られる。そのような効果はどのような分野の学びにおいても普遍的で汎用性高く求められるものであるからだ。

このような点は、筆者が目指す読書習慣形成の契機としては必携である。題材とする文学作品に関連する場面（時には直接関係ないような）を絵図で表現し、その絵図を読み取ることから、登場人物の置かれた状況や心情を想像し、そこから読書の楽しさが十分形成されるよう導入することで大学生の読書習慣形成に効果的ではないかと予想するのである。

### 第3章 看图作文実践

#### (1) 看图作文の手法

前章で見たように、看图アプローチは看图作文授業づくりの研究から得られたノウハウをさまざまな教科や領域の授業づくり等に適用していくことである。よって看图アプローチを実践するには、まず看图作文の技法をしっかりと身に付ける必要があると感じる。

看图作文の技法については鹿内の研究成果に学ぶことにする。鹿内は中国式の看图作文に対して、「心理学や記号論・物語論等の研究成果を活用して看图作文の授業理論」<sup>(16)</sup> を構築し、絵図もオリジナルのものを作成した。これらの手法により中国式の看图作文に対して、自らの実践を「新しい看图作文」とよんでいる。（ここでは鹿内の提案した日本式の新しい看图作文を「看图作文」とよぶ

ことにする）看图作文では学習者に絵図を読み解かせていかなければならない。鹿内によると、絵図の読み解きに必要な活動は、「変換」「要素関連づけ」「外挿」である。

まず「変換」は、テキスト中で記述されている概念や内容を別の言葉に言い換えたり、ある種の記号表示法を他の表示法に変えたりする活動である。次に、「要素関連づけ」は、テキストを構成している諸要素を相互に関連付ける活動である。最後に「外挿」はテキスト中で記述されている内容を超えて、結果について推測したり発展的に考えたりする活動である。<sup>(17)</sup>

以上を参考にしながら、実際に大学生に看图作文の授業を実践していく。

#### (2) 看图作文の授業実践

ここでは実際に大学生に看图作文の授業を行ない、看图の手法は大学生にどの程度受け入れられるのかを把握する。そしてそのことで得られた知見から、次の目的である「自立した読書人育成のための看图アプローチ」の手法へ応用していくことをめざす。よって今回の授業実践は、そのための基礎的、導入的な位置づけである。

対象：「卒業ゼミ（基礎）」を履修している短期大学1年生2年生70名（7人ずつ10班）

実施：2021年10月5日

授業テーマ：「生き方を模索する想像力を育てる」

方法：4枚の絵図を順番に提示し、グループで質問に順次答えていく。最後に作文する。

- ① 絵図1を提示しながら、主発問1「この人が次にすることを想像しましょう」(外挿発問) グループで話し合いワークシートに記載する



看图作文提示絵図1

『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち—看图作文レポーター—』所収  
石田ゆき氏作成

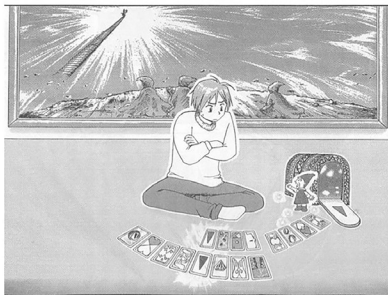


- ② 絵図2を示して①の予想に対する答え合わせをする。



看图作文提示絵図2  
『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち—看图作文レパートリー—』所収  
石田ゆき氏作成

- ③ 絵図3、絵図4を順次提示



看图作文提示絵図3  
『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち—看图作文レパートリー—』所収  
石田ゆき氏作成



看图作文提示絵図4  
『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち—看图作文レパートリー—』所収  
石田ゆき氏作成

- ④ 絵図3、4を提示しながら主発問2-1「小人が語った内容はどのようなことでしょうか」、主発問2-2「それを聞いたこの人が気づいたことを想像しましょう」個人で考えを記入する
- ⑤ 絵図1～4までを通して、作文作成
- ⑥ 看图作文を体験しての感想
- ⑦ 授業のアンケート1～5の5段階評価記入  
(5:とても良かった 4:良かった 3:ふつう 2:あまり良くなかった 1:悪かった)

結果:

- ① 絵図1に対する設問「この人が次にする行動の予想」の結果

1班	次のカードを並べる 思い通りにいかずカードを投げ捨てる
2班	悪いカードに不安になる 友達にメールする
3班	やり方がわからず本で調べる 次のカードを出す
4班	良いカードが出るように祈る 呪文を唱える
5班	カードを全部並べる かご?から何かが飛び出る
6班	並んでいるカードをぐちゃぐちゃにして やめる(悪いカードにむかつく)
7班	おなかがすいたのでやめる 部屋が暑いのでセーターを脱ぐ
8班	次のカードを並べてその次をどうするか考える ハリーポッターのように呪文練習
9班	将来が不安になる 誰かに話したくなる
10班	全部のカードを並べ終わる 人の心が読めるか試してみる

- ② 答え合わせで「予想通り」「そうか」「そっちはあ」と盛り上がりを見せる。  
おとなしく発言のなかった学生にも笑顔が見られたり、頷いたりという様子が見られた。
- ③ 絵図3、4の提示に対して、開始当初より興味を持って絵に見入る学生が増えた。
- ④ 絵図3、4への主発問2-1「小人が語った内容はどのようなことでしょうか」、主要発問2-2「それを聞いたこの人が気づいたことを想像しましょう」に対しては個人での記入であり、すらすらと記入する学生、考えながらゆっくり記入する学生、長文を記載する学生、単文で終える学生など散見された。
- ⑤ 絵図1～4までを通して、作成された作文のうち、以下に特徴的なものを紹介する。

### 学生A

新（しん）は悩んでいた。そうこれからの人生について。どんな選択をすれば一番良い選択になるのかと。部屋の真ん中で一人座りながら、カードをそろえると神の使いが訪れるというゲームをしていた。しかしどのようにカードをそろえれば神の使いが現れるのかわからず悪戦苦闘しているうちに1時間が経過した。すると、突然カードが光りだし、ボックスの中から神の使いが現れた。新はうれしくて仕方がなかった。そして、さっそく神の使いに聞いてみた。「僕はいったいどんな人生を歩むのか」と。すると使いは「それは答えられない」といった。「なぜだ」と問い詰める新に対して、使いはこう言った。「君の人生は君にしか決められない。これからの君の行動次第で君の人生は変わっていくのだから。その変化は神の使いの私でもわからないのだよ。」

新はハッとした。その二日後そこには生まれ変わったような新の姿があった。今まで前向きに考えてこなかった自分の将来について、神の使いの言葉を聞き、他人の言う通りの人生ではなく、人生は自分で決めるものというように考えが変わったのだ。たくさん本を読みたくさん勉強をした。新は今自分の部屋に飾ってある絵のように頂上を目指し行動を開始した。より良い自分の将来を目指して。

### 学生B

少年は努力することもなくただ何となく言われたことをやって生きてきた。カードゲームをしてはだらりと生きていた。なのでうまくいくこともあり、うまくいかないこともあった。ルール、本質を頭の中で整理したり、理解したりなどをしなかったからである。そして悩み、苦しんでいた時にかごの中から一人の小人が現れた。小人は少年に向かってこう言った。「まず全体をよく見て、何か法則を見つけてみるとよい。わからなければわかるために勉強してみたり、知識を身に着けてみることから始めてみて。」アドバイスをもらった少年は本を読んだりたくさん勉強をしてみた。今はゴールに向けて努力の真っ最中である。気のせいかわ彼の部屋の絵の階段の先にあるゴールのような星も少し近くなったような気がする。

### 学生C

主人公のキョウスケは自分の生き方に悩んでいた。近頃は自分の将来をカードなどの運に頼って決めていた。たまたまカードがそろると、隣の箱から妖精が現れた。キョウスケは「やったー妖精が現れた。」と喜んだ。キョウスケと妖精はしばらく話を楽しんだ。突然妖精は「キョウスケは将来をどのように考えているの？」とまじめな表情で聞いてきた。キョウスケは「自分で決めると責任が自分に降りかかるからカードやほかの誰かに決めてもらっているんだよね。だから漠然としている。」と答えた。すると妖精は「それでは駄目！自分で選んで自分で行動しないと望むような未来にならないよ」ときっぱりと言った。妖精に言われてキョウスケはハッと気づいた。そこからキョウスケの表情が変わり、自分の未来を考え努力するようになった。努力し続けていると目標に近づけた。キョウスケは妖精から自分で目標を設定し、努力することの大切さを教わった。

### ⑥ 看图作文を体験しての感想

**学生A**：このような絵を見て作文するのは初めてで看图作文という名前を初めて知った。

ちょうど1年の後期が始まり、そろそろ就職のことを真剣に考え始めていた自分に重ね合わせて作文した。何もない状態で将来のことを模索する作文を書くよりも主人公に感情移入して書くほうが、自分の気持ちに素直になって書けるような気がしている経験になったと思う。もっとほかの絵やテーマでも看图作文をやりたい。

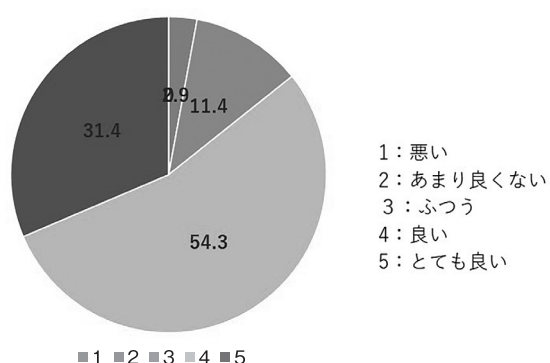
**学生B**：私が作文に使ったセリフは私が今授業で学んで気に入っている言葉です。「ルール、本質を頭の中で整理したり、理解したりすると良い」「まず全体をよく見て、何か法則を見つけてみるとよい。わからなければわかるために勉強してみたり、知識を身に付けてみることから始めてみて。」これはある授業で学びました。すごくいいなあと思ってずっと残っていたので、それを使いました。私自身もこの言葉を大事にしています。看图作文に当てはめて使ってみました。楽しかったです。

学生C：キョウスケは今の自分。妖精の考えももう一人の今の自分。そんな気がする。普段言葉にしないけど、作文してみて自分が悩んでいることがはっきりした。やっぱり自分の人生は自分で切り開かないとですね。ガンバります。

#### ⑦ 全学生による授業のアンケート結果

「看図作文授業アンケート」1～5の5段階評価記入（5：とても良かった 4：良かった 3：ふつう 2：あまり良くなかった 1：悪かった）

図1：看図作文授業アンケート



#### 考察：

看図作文におけるグループワークでは、学生同士での話し合いが普段よりもスムーズに行われ意見も活発に出ていた。やはり絵図が介在することで具体化しやすく話のきっかけになるのではないだろうか。

作文に関しては学生A B Cの三人を選んで掲載した。学生Aは自身の就職を考える現状にこの絵図を重ね合わせて作文している。自分の将来を自分で決めるというセリフに自分の背中を押しているように感じられる。学生Bは授業で学んだ言葉を利用して作文している。これも就職に関連する授業での言葉である。やはり将来を模索する自身の琴線に触れた言葉を書くことで、その気持ちを大事にして進む姿勢が作文に表れている。学生Cは普段無意識であった、あるいは考えないようにしていた将来設計に対して、自分の中での葛藤する二つの考えを、主人公と妖精のセリフとして表現した。意識してそう書いたというより、書いてみて、自分の中の対立する考えであると改めて気付いたのである。作文で表現することで、ぼんや

りとしていた自分の悩みが、明確になったと本人も言及している。

学生A、学生B、学生C、いずれも看図作文を通して、「将来への模索」が進んでいる。そしていずれの学生もが、看図作文を実践したことに対して高評価であった。

最後に学生による授業評価の結果について、5段階評価においては、とてもよかった31・4%、良かった54・3%、ふつう11・4%、あまりよくない2・9%、悪い0%であった。85・7%の学生が「とても良かった」「良かった」と回答しており、看図作文を好意的に受け入れていることがわかる。

以上のことから、大学生を対象とした看図作文は学生をひきつける指導の手法として有効であると言える。

#### おわりに

今回大学生を対象に看図作文を実践した。絵を見て作文することを大学生がどれくらい受け入れるのかと懐疑的な部分もあったが、結果は好評であった。しかし、授業のクラス規模が大きく、1グループ7人、10グループ編成は少し目が届きにくく、90分で4つの絵図の提示からグループワーク、作文作成、感想文作成まで終えてしまったので、十分に趣旨をくみ取れない学生もいたと考えられる。対象とする授業科目の選定も今後の課題である。また、授業実施者（筆者）の不慣れさにより、主発問以外の発問が有効に発せられなかった。看図作文は絵図の工夫もさることながら、発問の有効性が問われる指導法である。(18) 今後、主発問以外の発問に関しても研鑽を積むことが重要な課題である。

さらに今回取り上げた学生A B Cの3つの作文以外にも自己を投影したような素晴らしい作文が多く見られた。また授業後のアンケート結果の高評価が見られた。このことから、大学生にとって看図作文は好評価な授業であることがわかる。

以上のことから、看図作文から派生した看図を利用した手法を検討し、本来の研究の目的である「自立した読書人育成のための看図アプローチの構築」へ応用していくことをめざしていく。

引用・参考文献

- (1) 「学習指導要領高等学校国語」文部科学省平成30年告示
- (2) 大西直樹「リベラルアーツ教育における文学教育の歴史と可能性」科研費基盤研究(B)2008年-2011年
- (3) 工藤真由美「教養の文学を適切に授業展開するための方策—時代背景の理解から解釈変容へ—」四條畷学園短期大学紀要第52号2019年pp34-38
- (4) 工藤真由美「教養の文学を適切に授業展開するための方策Ⅱ—構成の理解から解釈変容へ—」四條畷学園短期大学紀要第53号2020年pp27-38
- (5) 間瀬茂夫「自立した読書人を育てる国語科授業の開発」広島大学学部附属学校共同研究紀要45号2017年
- (6) 菅井洋子「赤ちゃんと絵本」日本読書学会編『読書教育の未来』、ひつじ書房2019年pp3-15
- (7) 垣花真一郎「かな文字の修得と読みの発達」『読書教育の未来』ひつじ書房2019年pp28-38
- (8) 高橋登「児童・生徒の語彙力、読解力と読書」『読書教育の未来』ひつじ書房2019年pp49-60
- (9) 深谷優子「児童期における読書」『読書教育の未来』ひつじ書房2019年pp39-48
- (10) 秋田喜代美「中学生・高校生における読書」『読書教育の未来』ひつじ書房2019年pp61-72
- (11) 鹿内信善編著「看図作文指導要領」溪水社2010年
- (12) 奥泉香『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探求』ひつじ書房2019年
- (13) 安氏洋子 徳永基与子 鹿内信善「看図アプローチ協同学習ワークショップ—幼稚園教員養成・看護教育等でのいかし方—」第12回日本協同教育学会全国大会発表要旨集所収.
- (14) 同上
- (15) 同上
- (16) 鹿内信善編著『看図作文指導要領』溪水社2010年p5
- (17) 同上 pp5-6
- (18) 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち—看図作文レポート—』鹿内信善編著ナカニシヤ出版2014年p9

— 2021.11.13受稿、2021.11.15受理 —